

会 議 記 録

高松市附属機関等の設置、運営等に関する要綱の規定により、次のとおり会議記録を公表します。

会 議 名	令和８年度第１回高松市創造都市推進審議会
開催日時	令和８年８月２０日（木） 午後１時３０分～午後３時
開催場所	あなぶきアリーナ香川 会議室２
議 題	（１）第３次高松市創造都市推進ビジョンに係る成果指標の達成状況について （２）第３次高松市創造都市推進ビジョンにおける取組について～世界～ （３）ユネスコ創造都市ネットワーク加盟申請の状況について （４）その他
公開の区分	☒ 公開 ☐ 一部公開 ☐ 非公開
上記理由	
出席委員	佐々木会長、原副会長、出木浦委員、神高委員、二宮委員、中村委員、荒川委員、香西委員、平田委員、若井委員、杉ノ内委員、俣野委員
傍 聴 者	３ 人 （定員 ５ 人）
担当課及び 連絡先	産業振興課 創造産業係 ８３９－２４１１

審議経過及び審議結果
１ 開会 （事務局から開会の挨拶） ２ 議題（１）・（２） 【事務局】 （資料１・資料２について説明）

審議経過及び審議結果

【会長】

議題（１）の成果指標に対する御意見や、議題（２）の基本方針「世界」の下、高松の魅力を世界に発信し、「創造都市 高松」を確立させるための、今後の取組について、御意見を伺いたい。

【委員】

「瀬戸内国際芸術祭」は県、関係市町及び福武財団等の協力により開催しているものと認識しているが、高松市が具体的に関わっているところは何か。

【文化芸術振興課】

瀬戸内国際芸術祭は、県が実行委員会を立ち上げ、そこに市町が参画し、運営している。高松市は、県の負担金の約半額を負担しており、負担金は、主に女木島、男木島、大島、高松港エリアにおける会場の運営費や作品の維持管理費等に使用している。

【会長】

瀬戸内国際芸術祭の開催が継続することにより、男木島に移住者が増え、小中学校が再開するなど、経済効果にとどまらず、地域の再生効果があったという点で、本取組は非常に有意義なものだと考えられる。

【委員】

「創造都市高松」について考える中で、世間一般的には、創造性やクリエイティブという言葉が、一部の知識や経済的な余裕のある人のものとして捉えられているように感じる。しかし、本来の創造都市とは、誰もが多様な価値観に触れ、新しい発想を育める環境であるべきだと考える。

特に現在、外国人に対する偏見や不安が広がっていることを強く感じている。異なる文化や背景を持つ人と接する機会が少ないほど、「違うもの」への不安や誤解は生まれやすくなるため、芸術や文化、教育、地域活動等を通じて、日本人と外国人が日常的に交流できる機会を増やすことが重要だと考える。

例えば、子ども食堂等、誰でも参加できる地域の間と外国人住民をつなぐ取組が考えられる。経済的な余裕や特別な知識がなくても、多様な人や文化に触れられる環境を整えることで、互いの理解が深まり、発想も豊かになると考える。すべての市民が心豊かに創造性を育める「クリエイティブ高松」を目指してほしいと思う。

【会長】

最近、オーバーツーリズムが問題となっている。京都市内でも、観光地に多くの外国人観光客が訪れる一方で、日本人観光客が減少しているという話を聞く。こうした状況の背景には、日本におけるグローバル化が十分に進んでいないこともあるのではないかと思う。だからこそ、様々な場面で多文化共生を進めるための場づくりが必要だと考える。

【観光交流課都市交流室】

本市では、増加する外国人住民を地域社会の一員として受け入れることが重要だと考えている。外国人への支援に加え、日本人と外国人が交流する場を設け、相互理解の促進に取り組んでいる。また、高松市国際交流推進協議会とも連携し、様々な取組を進めている。効果が現れるまでには時間がかかるが、今後も丁寧に多文化共生の取組を進めていく。

【委員】

農業を営む中で「世界」を意識する場面は、円安による資材価格の高騰や国際情勢による燃料、資材への影響など、ネガティブなものに関することが多い。一方で、自分たちが生産する米や野菜、果樹が世界の人々に届いているという実感はあまりない。現在の高松市の農業施策も、国から示された事業を実施するものが多く、高松市独自の取組が少ないように感じる。今後は「世界に通じる農業」を意識した施策目標を掲げ、農業関係の審議の場でも議論してほしい。

市民満足度調査の結果を見ると、文化芸術の創造と継承に対する評価が高い一方、商工業や農業の振興、就業環境の充実、定住人口の拡大等は評価が低い。文化芸術に力を入れることは重要だが、それを産業振興や雇用、人口増加につなげていかなければ、都市全体の発展にはつながりにくい。文化芸術を起点として産業や地域経済の活性化につながる施策を進めてほしい。

議題（２）の盆栽に関する映像の中で、外国人観光客が盆栽に触れている場面があった。もし触れてはいけないものであれば、映像によって誤解を招く可能性もあるため、実際に触れてよいのかどうか、教えてほしい。

農業現場では、外国人技能実習生や特定技能外国人が重要な労働力となっており、外国人が７～８割を占める事業者もある。今後、就業人口の減少を外国人材が補う状況は、農業に限らずさまざまな業界で増えていくと考えられる。外国人を単なる労働力や観光客としてではなく、高松市で働き、暮らし、子どもを育てる「地域住民」として捉え、生活支援や交流を含めた多文化共生の施策を進めてほしい。

今回、デジタル化の方針に合わせて紙資料を使わず、スマートフォンで資料を確認したが、画面が小さく閲覧しにくいと感じた。一方で、事務局は紙資料を使っており、デジタル化が進んでいないようにも見受けられた。デジタル化を進めること自体は重要だが、無理のない形で進めてほしい。

【農林水産課】

1つ目の農業施策について、現在、農業分野では、原材料や資材価格の高騰が大きな課題となっている一方、米価は上昇しているものの、その他の品目では、資材価格の上昇に価格の上昇が十分追いついていない状況だと認識している。高松市では、国や県の予算を活用した事業が多いが、市独自の施策として、スマート農業システムの導入支援や、国や県の制度では対応しにくい小回りの利く農業機械の導入支援、農福連携等を実施している。今後も、都市型農業という高松市の特徴を踏まえた独自施策を検討していきたい。

続いて、3つ目の盆栽事業についてお答えする。盆栽は海外での需要が高まり、輸出が増える一方、長い年月をかけて育てるため、産地では、盆栽資源の枯渇が課題となっている。そこで、盆栽そのものを海外へ販売するだけでなく、欧米等から観光客を誘致し、盆栽の剪定等を体験してもらうことで、盆栽を売らずに地域に経済効果を生み出す取組を進めている。盆栽は植物検疫のため海外への持出が難しいことから、こうした体験型観光を通じて盆栽の魅力を発信し、今後も様々な事業を展開していきたい。また、今回御紹介した盆栽の映像の中でも、盆栽に触れる場面があったが、そうした体験プログラムを販売しているという背景があり、御理解いただきたい。

【産業振興課】

2つ目の市民満足度調査の結果について、同調査では、文化芸術に比べて商工業や就業環境などの評価が低く、市民の方からも「働く場所がない」という声を聞いている。県外へ出た人が高松に戻ろうとしても、働く場が少ないことが課題となっている。これらの課題に対し、本市では、起業を目指す人を支援するスタートアップ促進事業や、高校生等の若者が地元企業を知る機会づくり等を進めている。今後もこうした取組を拡大し、地元で働くことを選択肢の一つとして考えてもらえる環境を整えていきたい。

続いて、5つ目の資料のデジタル化については、会議資料の配付方法を含め、事務局で改めて検討していく。

【観光交流課都市交流室】

4つ目の多文化共生施策について、現在、少子高齢化による労働力不足が進

む中、外国人が重要な担い手として活躍している。本市では、外国人住民や労働者が地域で安心して生活できるよう、日本語学習の機会の提供や行政手続きの支援、相談体制の充実等に取り組んでいる。今後も、外国人が地域社会の一員として安心して暮らし、働くことができる環境づくりを進めていきたい。

【会長】

委員の皆様から、文化芸術分野の施策効果が産業や経済分野に波及していないという指摘があったが、その要因としては、国際情勢の不安定化による経済への影響が大きいのではないかと考える。

【委員】

盆栽は、農林水産物としての価値だけでなく、芸術性やブランド性も備えており、様々な分野と組み合わせることで相乗効果を生み出せる魅力的な地域資源である。盆栽の映像等を通じて、盆栽が地域の産業として取り上げられ、活躍の場が広がっていることを大変うれしく感じている。今後も香川県、高松市の盆栽産業をさらに盛り上げていきたい。

【委員】

創造都市の取組について、個別の KPI や事業ごとの指標だけでなく、創造都市全体としてどのような成果が生まれたのかを測る指標があってもよいのではないかと考える。例えば、クリエイター人口や創造産業の事業者数、文化芸術をきっかけとした移住者数、クリエイティブ分野での創業数等、創造的な人材や産業が増え、それがまちの魅力や移住・定住につながっていることを示す指標が考えられる。

また、瀬戸内国際芸術祭等をきっかけに高松を訪れた人を、移住・定住や地域との継続的な関わりにつなげる取組も重要である。さらに、福祉分野へのデザイン支援や、アーティスト・イン・レジデンスのように、外部のクリエイターや外国人ジャーナリストを高松に招き、外からの視点で高松の魅力を発信してもらう取組も効果的ではないか。

【会長】

これまで本審議会では、創造都市としてクリエイティブな要素を伸ばすため、様々な施策を検討してきた。第 1 期の取組では、保育所への芸術士派遣事業等、全国的にも評価される成果が得られている。一方で、創造都市として高

松市がどこまで進展しているのかを把握するためには、個別の事業成果だけでなく、芸術文化の取組がどのような波及効果を生み、まち全体にどのような変化をもたらしたのかを示す、総合的な指標やロジックモデルを検討する必要がある。

また、海外への情報発信については、外国人ジャーナリストやインフルエンサーを高松に招き、実際に滞在してもらった上で、海外向けに高松の魅力を発信してもらう方法が有効ではないかと考える。金沢市では、海外のインフルエンサーを活用した情報発信によって成果を上げている事例もあるため、高松市でも戦略的な取組として検討してほしい。

【委員】

瀬戸内国際芸術祭やピアノコンクール等、高松の魅力を世界に発信でき、経済効果も期待できるイベントは、今後も継続していくべきだと考える。一方で、こうした大規模なイベントの成功には、出演者やアーティストだけでなく、地域住民やボランティアとして運営を支える市民の存在が欠かせない。

特にピアノコンクールでは、ボランティアの方々が熱心に活動する一方で、負担が大きいように感じる場面もある。運営側から、こうした方々への敬意や感謝をより示すとともに、その活動を広く市民に発信することが重要ではないか。ボランティアの取組を知ってもらうことで、市民の理解が深まり、「自分も参加してみたい」と思う人を増やすことにもつながる。出演者やアーティストだけでなく、イベントを支える市民の努力にも光を当て、活動を広く発信することで、地域全体でイベントを支え、さらに活性化させる取組を検討してほしい。

【文化芸術振興課】

ピアノコンクールの実行委員会にて、本日いただいた御意見を共有させていただき、何か取組ができないか、今後検討していきたい。

【委員】

高松市には、文化芸術、国際交流、観光等、世界とつながる優れた資源が数多くある。一方で、それぞれが個別の事業として実施されているように見え、横断的な連携が十分ではないように感じる。これらをつなぎ、「世界とつながる高松」という一つの創造都市戦略として展開できれば、より大きな相乗効果が生まれるのではないか。本審議会においても、行政からの説明を受けるだけでなく、分野を越えて議論する場を積極的に設けてほしい。

盆栽についても、映像制作やグッズ販売等、様々な取組が行われているが、行政の縦割りによって、それぞれの活動が十分につながっていないように感じ

る。盆栽を高松市や香川県の魅力として発信していくのであれば、既存の取組や商品などを横断的につなぎ、より効果的に発信していくことが必要ではないか。

また、高松市には盆栽に関連した書籍やグッズ等、地域の魅力を発信できる商品があるにもかかわらず、それらをまとめて販売・発信する場が十分でないように感じる。特に美術館のミュージアムショップは、国内外から訪れる人にとって楽しみの一つであり、地域の文化や産業を知ってもらう重要な場所でもある。高松市の美術館でも、地域性のある商品を扱い、魅力的なショップづくりを進める等、ミュージアムショップの充実を検討してほしい。

【美術館美術課】

高松市美術館には現在、ミュージアムショップがあり、奈良美智さんのメモ帳や川島猛さんのふせん等、いくつかの商品を取り扱っている。ただし、商品のバリエーションはまだ少なく、ショップの充実は今後の課題と認識している。

一方、盆栽そのものについては、美術館の性質上、植物や水等を扱うことが難しいため、取り扱いが困難だが、盆栽関連商品については、今後検討してまいりたい。現在は、美術館食堂にて特別展に合わせたコラボメニューを企画する等、新たな取組も始めている。今後もショップや企画を充実させ、より多くの市民や来館者に親しまれる美術館を目指していきたい。

【委員】

県外で様々な方と交流する中で、海外のビジネスパーソンが地域を訪れ、まちの魅力を感じて家族と再訪する等、ビジネスをきっかけに観光や交流へつながっていく事例を聞く機会が増えている。

高松には盆栽や水産物等、世界に発信できる地域資源がある一方、実際にどの程度、産業分野に取り組んでいるのか、市民からは見えにくい部分もある。

高松ブランドとして、産業を海外に売り出していくことも重要ではないか。

【会長】

インバウンドに向けて産業や地域資源を発信していくためには、誰をターゲットとするのかを明確にし、そのターゲットに訴求する情報を的確に発信していくことが重要だと考える。

例えば、最近、福井県越前市では、伝統工芸や工芸のまち並み等を生かし、富裕層や若者等のターゲットごとに異なる情報発信やプロモーションを行っている。その結果、三つ星レストランのシェフが工芸品のナイフを注文し、実際に現地を訪れる等、具体的な成果にもつながっていると聞いている。

高松市においても、誰に何を届けるのかを明確にし、ターゲットを絞った、きめ細かな情報発信やプロモーションに取り組んでいく段階にあるのではないかと考えている。

【委員】

今年、徳島の阿波踊りを実際に鑑賞し、地域外の人を強く惹きつける祭りの魅力を実感した。外国人の参加者も増えており、阿波踊りをきっかけに東京から徳島へ移住した人や、高額な栈敷席を利用する人もいる等、地域の魅力が交流や移住に繋がっている事例がある。

高松についても、外から見たときにどのような魅力があるのかを、客観的に捉えることが重要ではないか。

高松で働く外国人への聞き取りから、情報収集はインターネットや友人・知人とのネットワークが中心であり、市のホームページ等、行政からの情報が十分に届いていない実態も感じられた。

外国人の移住は、SNS やテレビ等で地域を知る段階から、興味を持ち、実際に訪れ、住んでみたいと思う段階へと徐々に進んでいく。そのため、それぞれの段階に応じた情報発信が必要ではないか。

こうした観点から、高松市が現在どのような情報発信の工夫を行っているのかを確認したい。

【委員】

近年、高松にも外国人観光客がかなり増えてきたと感じている。一方で、今後はオーバーツーリズムのような状況になる可能性もあるのではないかと感じている。現在は高松の中心部を訪れる方が多いと思うが、アジア圏をはじめ、様々な国から観光客が来ている中で、中心部だけではなく、市内の様々な地域へ観光客を分散させていくことも重要ではないか。

高松には中心部以外にも魅力的な地域が多くあるので、そうした地域への移動手段や交通環境等を整えながら、観光客が市内を周遊できるようにしていくことで、中心部の混雑緩和にもつながるのではないかと思う。

また、資料2の10ページにある、瀬戸内国際芸術祭における市民の作品制作ワークショップへの参加については、とても良い取組だと感じている。今後、ユネスコ創造都市ネットワークへの加盟申請について、音楽分野での取組を進めていくのであれば、市民が音楽を鑑賞するだけでなく、自分たちで演奏したり、音楽をつくったりする側になれる機会をもっと増やしていけると良いのではないかと思う。

クラシックやジャズ等は、技術や人数の観点から、市民が取り組むにはハードルが高い面もあるが、AI等の新しい技術も活用しながら、市民が気軽に音楽

に参加できる機会を増やしていくことが、取組の裾野を広げることにもつながるのではないかと思います。

3 議題（3）

【文化芸術振興課】

ユネスコ創造都市ネットワークへの加盟申請の状況については、前回、令和7年11月の本審議会において、音楽分野での加盟申請が認定されなかった旨を報告した。その後、ユネスコ本部から、音楽を持続可能な都市開発等に活用している具体的な事例の提示や、地域内外の文化、創造活動分野における連携強化等が改善点として示された。また、認定都市の多くが、再申請を経て認定に至っているとの指摘もあった。

これを踏まえ、前回の申請内容をブラッシュアップするとともに、地域内外の連携を強化する取組を進め、再申請に向けて準備している。次回の応募要領は未発表であるが、前回の令和6年度と同様のスケジュールを想定し、準備を進めている。

【会長】

過去には山形市が映画産業で申請したケースや、丹波市の事例があるが、いずれも2回目の申請で認定に至っている。

本市の場合も、今後さらに申請書の内容や取組内容の幅を広げることによって、再度チャレンジしていければ良いと思う。現在、そのための取組を進めているところだと思うので、委員の皆様にも、御支援をいただきたい。

【副会長】

海外から高松に来て、住んだり働いたりしている方々に、高松の文化や魅力を知っていただくことはもちろん重要だが、逆に、私たちが外国人の文化について知る機会をつくることも非常に大切だと思う。

例えば、大阪府堺市では、ベトナムとの姉妹都市関係を生かし、相手国から若者を一定期間招き、小学生に自分たちの文化を直接伝えてもらうような取組が行われている。

高松でも、今後こうした取組を少しずつ進めていき、相互にお互いの芸術や文化を知ることができればと思う。芸術文化を知ることがきっかけに、相手の国や人そのものを理解することにもつながり、様々な交流や新たな取組のきっかけになるのではないかと感じた。

（創造都市推進局長から挨拶）

4 閉会

（全ての議事を終了し、閉会した。）